文芸

俳句

トランプの独り遊びの女正月　池田　逸子

初晴れや一山ゆする護摩太鼓　伊藤　敬子

豆の芽や野鳥飛び立ち残る茎　今関満喜子

伐り倒す大樹の影の紅椿　魚地　照子

ひいらぎの花枝も添へて節の膳　江森　悦子

書くことを覚え曾孫の年賀状　大谷　武彦

大寒の岬に望む富士白し　川島　孝夫

暮れなづむ早春の野良人動く　川島　通則

初氷転がり遊ぶ童かな　向後　寛

野良猫を手なづけし児等春立ちぬ　越川せつ子

節分を忘れ赤鬼お父さん　小松　藤男

着凝りや朝日を掬ふ銀の匙　佐瀬　輝夫

靴底の雪地団駄に払ひけり　宍倉　道子

二月はや幹の艶めく庭木かな　鈴木とし子

ウォーキング浅春の空たまに見て　鈴木　利子

蕗の薹春をもたげて来りけり　玉虫　栗扇

木の間吹く風のざわめき春浅き　土屋美枝子

薄氷をかざし輝く瞳かな　土屋　義昭

下萌ゆる大地の温み感じをり　戸村　静萃

春浅し絵手紙届く午後三時　西崎さち子

職退きてとうに十年春炬燵　早川　勇

子に孫に受け継がれゆく御大般若
里の行事の絶ゆることなく　土屋　好

……

開きたるシンビジウムが縁側に
射しくる冬陽吸ひ込みゐたり　八角　三枝

日盛りを畑に出て来て雪溶けの
沁みて温とき土握りゐつ　青木　秀子

畑の辺に終日遊びし小雀は
夕暮れどきにぱっと飛び立つ　平山　芳子

何ひとつ労働らしき事もせず
一番風呂に今日も入りぬ　吉岡　信子

寒さ中黄なる臘梅咲き盛り
清しき香り漂はせゐつ　押尾　輝子

夕焼の茜に染まる畑中に
箱は葱を束ね続くる　鈴木まさ子

冬の水堪へしプールは静もりて
廻りの木木の影を映せり　芹川　初子

年納めと第九を聴きに出かけたり
苦悩と歓喜吾を包めり　田崎　尚美

裸木のメタセコイアの伸びし先
雲一つなき青空のあり　西山満里子

澄み透る寒の入り日の照り映えて
総野はいまし浄土となりぬ　斉藤つね子

短歌

老いてなを人恋う心胸深く埋もれ
火として明日を生きん　越川　義則

喊声の聞こゆるばかり鉾建てゝ
幸矣の花茅光り空突く　越川　福子

己が意志表す術の無き如し
生かされている義姉九十九歳　高梨　キヨ

年一度賀状に託す老いの身の
生きてる証九十二の春　伊藤　定男

伊達直人すさむ世にありさわやかに
多くの人が和むうれしさ　鈴木　益郎

こうほう博物館 36

めだかの学校

弥生三月になって、日に日に陽の光がまぶしさを増し、川の水も温んできます。そうすると川の水面に、どこからとなく小さな魚が群れとなって泳いでいるのを見かけます。めだかです。

めだかは北海道を除く日本各地に生息する、もっとも小さい淡水魚で、流れの緩やかな小川や池、水田などで見ることができます。しかし、近年環境の変化からかその生息数は全国的に減少し、あまり見られなくなってきました。そのため平成十五年には、環境省が絶滅危惧種に指定し、保護の対象となりました。そこでめだかを全国的に詳しく調査したところ、地域によって多様性があることがわかり、地域ごとのめだかを保護する必要もでてきました。また、中には赤色や白色などの変わっためだかを飼育する愛好者もいて、単なるめだかといえなくなってきました。

町内でも水田や水路は多くありますが、めだかの泳ぐ姿を見ることはまれになりました。写真は町内で見つけためだかです。水槽で飼育し、繁殖を試みています。めだかは春から初夏、水草に卵を産み付け、二十日ほどで孵り一年ほどで親になり、また卵を産みます。こうしてめだかを増やし、元の川に帰して、小川に多くのめだかの泳ぐ姿が見られるように願っています。

また、子供のころ歌った「めだかの学校は川の中　そっとのぞいてみてごらん」今の子供たちにも口ずさめる様に。

▶水槽の中のめだか